慢性期軽度意識障害評価スケール開発へのアプローチ
ー病態生理学からのアプローチー

篠田 淳

木沢記念病院・中部療護センター
岐阜大学連携大学院医学系研究科 脳病態解析学分野

頭部外傷慢性期における軽度意識障害は概ね「高次脳機能障害」を指すと考えられる。当施設ではMRI、FDG-PETを用いて慢性期脳外傷の病態を把握することに努めてきた。頭部外傷後に出現した認知障害、注意力障害、遂行機能障害、社会的行動障害を訴え、高次脳機能障害の診断を目的に平成24年1月から平成25年2月の間に当施設の外来を受診し、MRI、FDG-PET、ECD-SPECT、神経心理テストを受けた頭部外傷慢性期（受傷より6カ月以上経過）患者は135例（軽度外傷性脳損傷97例、中等度外傷性脳損傷20例、重度外傷性脳損傷18例）であった。これら135例のそれぞれの画像所見を点数化し、総合的に画像上の重症度評価を行ったので報告する。DTI、FDG-PET、ECD-SPECTを用いることにより、通常のCT、MRIのみでは評価不可能な重症度分類が可能であった。また、これらの画像は特に軽度外傷性脳損傷患者の評価に有用であった。